
スカル・クルセイダース

ミッシ・ゴッシュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スカル・クルセイダース

【Nコード】

N5283F

【作者名】

ミッシ・ゴッシュ

【あらすじ】

その出来事は正に一瞬の内に俺の全てを、許可も無く奪い去って行った。俺はこれからどうなるのだろうか……。

昼下がりの午後、切らした煙草を買いに起き抜けの寝間着姿で近所のコンビニへとのおんびり歩く。

何気なく空を見上げるとぽつりと飛行機、その後に続く細長く伸びる雲。それをぼんやり目で追う、サンダル履きの俺。

通り沿いの公園にはけたけた笑い、大きな砂の城を造る数人の子ども達と、その近くのベンチに座る母親達。

「俺も子ども欲しいな」

その光景を目にした俺は本心ではない独り言を呟いた。

ぼんやり歩いていたのがいけなかったのだろうか、強烈な衝撃と共に世界が反転した。それは正に一瞬の出来事だった。

悠々と流れる大河。薄暗いながらも、それだけは確認出来る。

「これが三途の河？」

俺の第一印象はそんな感じだった。三途の河と言えば渡る物だとばかり思っていたが実際、目の前にあるそれを横切り渡る者などおらず皆、泳いで上流と思われる方向へと進んでいた。

この河には流れがなく、どちらが上流なのか、下流なのかかわからないが俺は気が付いた時、既に泳いでいた。

多分そっちの方向が上流なのだと、そしてそこに辿り着かなくてはいけない。そんな気がした。

俺は泳ぐのが得意ではないが、この体　いや、体と呼べるのかは不明だが、このおたまじゃくしの様な体は泳ぐのに適している様で、俺は先へと楽に進んで行けた。

道は直線、周りには大勢の俺と同じ姿をした者達がいる。そいつらがどう言った経緯で死に、ここに来たのか気になった。

俺の様に車に牽かれて死んだのか、はたまた病気で死んだのか、それとも自ら生を捨てたのか。

「考えても仕方がないか……」

その時の俺に人の体があつたなら一人不気味に微笑んでいる危ない奴に思われたかも知れない。

そうこうしている内に俺は大きな門の前に辿り着いた。扉の前には番が二人。いや、これまた人ではない。丸い肉塊が二つその前には沢山の白いおたまじゃくし。

「何とも気味の悪い光景だな」などと思っていると門番の片方が口を開いた。いや、口はない、頭に直接流れ込んで来た。

「この先、この門を抜ければ二つの道がある。」もう片方が続ける「一つは天国へ、一つは地獄へと続いている」

「しかし、天国へ行けるのはただ一人のみ」

「我等が言えるはただ一つ」

『生きたければ、勝ち残れ！』

門は開かれ、我先にと前へ前へと進む魂。

それはまるでスタート直後のマラソン競技、それはまるで決壊したダムのように。

それはまるで 人の薄汚い欲望の様に。

「肉体を失いし今もなお、人の欲は尽きる事なし、か」

俺は暫くそれを傍観した後、ゆるりと前へ進み出た。

道は直線、周りには沢山の俺と同じ姿をした者達がいる。そいつらがどういう気持ちで進んでいるのか気になった。

俺と同じ様にのんびりそこを目指すのか、はたまた必死の思いなのか。

それとも 生に無関心なのか。

そうこうする内に俺の前には左右二又の別れ道。進む者、悩み留まる者。

門番が言っていた天国と地獄の別れ道、間違えば後戻りは出来ないだろう。

俺は進む者が少ない右の道を選んだ。ライバルは少ないにこした事はない。

一応、俺にも天国に行きたいと言う気持ちは少なからずある。とは言え、この道が地獄へと続いているとしたら、ライバルの数など関係ないのだが、今は考えたくない。

『先を、目指す。』

今はそれだけだ。

道は曲線、周りにはちらほら俺と同じ姿をした者達。

そいつらは必死だった。必死に前へ前へと進んでいた。幾度となく俺は追い抜かれた。

しかし、暫く進むとそいつらは漂っていた。そいつらは力なく水中を漂っていた。

「水に、欲に溺れたか……。」

俺は幾度となくその屍を追い抜いた。

どれ程の時間が過ぎたのだろうか、どれほどの距離を泳いだのだろうか。

どれだけの屍を見て来ただろうか。

「欲に溺れた哀れな魂よ……地獄で会わないよう、願ってくれ。」

俺はそれら動かなくなつた『物体』を暫く見つめた後、再び進み出した。

道は終わった、周りには誰もいなかった。ここに来る途中、皆力尽きたのだろう。

その開けた空間の中心には丸い肉塊、あの門番よりも一回りも二回りも大きい。そしてそれは淡い光りを放っていた。

「これが地獄の入口なんて事はないよな……。」

俺はそれに近寄り、吸い込まれる様にその球体の中へと入って行った。

「ここが天国？」

第一印象はそんな感じだった。天国と言えば花が咲き乱れ、鳥が歌い、あらゆる望みが叶う。そんな所だとばかり思っていたが、実際そこには何もなく、ただただ光りの空間が広がるばかりだった。

「妄想と現実なんてこんな物か」

唯一、想像していた事と同じだったのは『天国に行けば生まれ変わる。』

俺は十月十日をそこで過ごした。

2007/04/02

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5283f/>

スカル・クルセイダース

2010年10月25日03時57分発行